

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.235

2012年12月

第8回名古屋大学ホームカミングデイを開催



目次

●ニュース	
第8回名古屋大学ホームカミングデイを開催	3
全学同窓会設立10周年記念行事を開催	7
あいちサイエンスフェスティバル2012を開催	8
地震防災訓練を実施	9
平成24年度世界トップレベル研究拠点プログラムに採択される	10
平成24年秋の叙勲受章者決まる	10
濱口総長が上海交通大学医学院60周年記念式典に出席	11
日本留学フェア2012を開催	11
平成24年度日本数学コンクール表彰式を挙げる	12
第38回経営協議会を開催	12
●知の未来へ	
複素力学系の「マルチパス」	13
川平 友規（大学院多元数理科学研究科准教授）	
●知の先端	
材料の機能性発現のメカニズムにシンクロトロン光で迫る	14
伊藤 孝寛（大学院工学研究科准教授）	
●部局ニュース	
第5回2012高校生向けセミナーを開催	16
第27回国際学術シンポジウムを開催	16
第15回名古屋ビジネスセミナーを開催	17
国際シンポジウム「教育分野におけるアジア新興ドナーと日本」を開催	17
創薬科学研究科創設記念行事を挙げる	18
ICCAE 2012年度第3回オープンセミナーを開催	19
ICCAE 国際シンポジウムを開催	19
グリーンモビリティ連携研究センター設立1周年記念式典を挙げる	20
2012年秋季特別展「時を超える贈り物」を開催	20
ミクロの探検隊を開催	21
第3回地球教室を開催	21
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年10月16日～11月15日	22
●イベントカレンダー	26
●ちょっと名大史	
学部の誕生と草創期④ — 教育学部 —	28

第8回名古屋大学ホームカミングデイを開催





2		
1	3	4

- 1 当日の案内板
- 2 記念撮影する全学同窓会海外支部長ら
- 3 国際交流貢献顕彰授与式の様子
- 4 名古屋フィルハーモニー交響楽団による演奏の様子

第8回名古屋大学ホームカミングデイが、10月20日（土）、東山キャンパス及び大幸キャンパスにおいて、全学同窓会の協力のもと開催されました。

当日は、好天に恵まれ、同窓生や在学生の家族、近隣住民の方々を中心に3,500名を超える参加がありました。

今年度は、「国際化」をキーワードに、「世界のなかの日本、日本のなかの世界」をメインテーマとし、大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センター（CALE）を中心部局として開催しました。当日の行事運営には、名大祭本部実行委員会や水泳部、陸上部に所属する多くの学生も加わり、教職員と力を合わせ、総合案内、駐車整理などの業務にあたりました。行事運営だけでなく、企画部分においても学生や留学生が参画し、会場のあちらこちらで同窓生らとふれあう光景が見られました。

■名古屋大学の集い

豊田講堂においては、周年記念同窓生（卒業後10周年、20周年、30周年、40周年、50周年を迎えた同窓生）を中心

とした多くの関係者の参加のもと、教育学部卒業生である浦口史帆東海テレビ放送アナウンサーの司会進行により、「名古屋大学の集い」を開催しました。

第1部では、初めに濱口総長、豊田章一郎全学同窓会会長からのあいさつがあり、次いで、ホームカミングディレクターである伊藤義人全学同窓会代表幹事から活動報告がありました。続いて、今年度で全学同窓会が設立10周年を迎えたことを記念して式典が行われ、韓国支部をはじめとする全学同窓会海外支部の支部長または代理の方々が登壇し、豊田会長からアカデミックガウンの目録や感謝状、記念品が贈呈されました。また、国際的人材群創出のさらなる促進を目的とする名古屋大学国際交流貢献顕彰の授与式があり、潘偉氏とレ・ティン・ロン氏に表彰状と記念品が授与されました。

続く第2部では、昨年度に引き続き名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートが行われ、大井剛史氏の指揮で、ヴァイオリンリストに吉田恭子氏を迎え、アンコールを含め4曲が演奏されました。





1階席は周年同窓生のための座席とし、卒業年次別で座席のブロックを用意しました。各ブロックで旧交を温める姿が見られました。

なお、名古屋大学基金に対する高額寄附者（100口以上）の方で参加を希望された方には、ご支援に対し感謝の意を表すため、指定席を用意しました。

■記念講演等

今年度のメインテーマに基づき、シンポジオンホールにおいて、全学同窓会副会長である丹羽宇一郎中華人民共和国駐^{もつ}留特命全権大使による記念講演を開催しました。講演のテーマは「グローバル化時代の大学と学生に求めるものー名古屋大学から Nagoya University へー」で、司会は教育学部卒業生である若狭敬一中部日本放送アナウンサーが務めました。立ち見がでるほど非常に大勢の参加者や報道陣が集まり、注目度の高さが伺えました。

記念講演の後は、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン等に設置した日本法教育研究センターとテレビ会議システムを接続し、現地の学生と懇談しました。

また、シンポジオンと隣接するアトリウムでは、法政国際教育協力研究センターが中心となり、ベトナム、インドネシア等アジア諸国の物産品の展示・販売が行われ、自国の民族衣装を着用した留学生が、普段日本では手に入り



くい珍しい民芸品などを販売しました。

■豊田講堂見学ツアー

今年度からの新企画として、本学のシンボルである豊田講堂の内部の見学ツアーを行いました。

現役学生のガイドが、豊田講堂が登録有形文化財に登録された際のプレートや、加藤唐九郎氏作の陶壁などに案内した後、普段は入ることのできない豊田講堂の時計塔の内部へ案内しました。参加者は、赤崎 勇本学特別教授の研究功績を称えて設置された、文字盤及び時計針、分針に青色LEDが組み込まれた時計を間近で見学しました。

■体験企画「名大ウォーキングツアー」

島岡 清本学名誉教授の監修のもと、健康づくりを意識しながらツアー形式で東山キャンパス内を散策しました。参加者は、学生のツアーガイドの案内により、豊田講堂からスタートし、赤崎記念研究館やES総合館内にある2008年ノーベル物理学賞・化学賞展示室など、東山キャンパス内にある教育研究施設や見どころを見学しました。

■体験企画「科学実験を体験しよう！」

野依記念学術交流館1階カフェスペースにおいて、本学の理系女子学生で構成されるコミュニティ「あかりんご隊」





による、子どもを対象とした科学実験体験企画が開催されました。今年は3Dの立体絵を描く実験などを行いました。

■体験企画「名古屋大学ミュージアム活性化プロジェクト」

豊田講堂前庭において、学生・若手研究者が中心となって「触れて感じる！ポケットミュージアム」を開催しました。赤外線カメラやプリズムなどの機材を用いて、「普段は見えない世界を見る」等の企画が行われました。

■大幸デイ

ホームカミングデイは、例年、東山キャンパスだけではなく、大幸キャンパスにおいても開催しており、大幸デイとも呼ばれています。大幸キャンパスでは、医学部保健学科が、午前中に市民公開講座「感染症をめぐる最近の話題：薬剤耐性菌、子宮がんウイルス」を、午後には学生サークル「おうちプロジェクト」との共催で、講演会「子どもと家族の療養生活と支援」を開催しました。

■多彩な講演会・展示の数々

メインテーマに沿った記念講演・展示に加えて、各学部・研究科が主催する催しも数多く行われました。

大学院教育発達科学研究科は、名古屋大学の集いで司会を務めた浦口アナウンサーと、テレビアナウンサーの仕事



について対談する企画を行いました。

大学院法学研究科は、文系総合館にある法廷教室を公開しました。

野依記念学术交流館2階カンファレンスホールでは、環境医学研究所市民公開講座「糖尿病と肥満－研究と治療の最前線」が開催され、学内外から4名の講師を招き、「食欲、肥満、長寿を科学する」をはじめとした講演及びパネルディスカッションが行われました。

附属図書館は、豊田講堂ホワイエにおいて、「時を超える贈り物～貴重書コレクション～」を開催しました。「徳川秀忠自筆かな書状」や「解体新書」、「リヴァイアサン」など、同館所蔵の中でも選りすぐりの貴重書が展示され、700名を超える来場者がありました。同館内においては、オープンライブラリーや図書館スタンプラリー、学生による活動・成果発表会が行われました。

博物館は、企画展「西條八束と日本陸水学の流れ」や、企画展に関連した特別講演会、野外観察園見学会など、様々な行事を行いました。

ES総合館では、9月29日(土)から11月4日(日)までの間、愛知県全域において開催された地域科学祭「あいサイエンスフェスティバル」の一環として、市民向けシンポジウム「先端科学技術と社会」が開催されました。



1	2	5	6
3	4	7	

- 1 丹羽大使による講演会の様子
- 2 アジア諸国の物産品の展示・販売の様子
- 3 豊田講堂見学ツアーの様子
- 4 体験企画「科学実験を体験しよう！」の様子
- 5 体験企画「名古屋大学ミュージアム活性化プロジェクト」の様子
- 6 対談する浦口アナウンサー（右）
- 7 模擬法廷教室の様子



■その他趣向を凝らしたイベント

豊田講堂南側ピロティの販売コーナーでは、本のリユース市、大学生協による名大グッズ等の販売が行われました。

豊田講堂前庭ステージでは、大学院国際開発研究科がカルチャーショーを開催し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ等から来た留学生が、それぞれ自国のダンスや歌などを披露しました。

豊田講堂前広場では、グリーンモビリティ連携研究センターがセグウェイ体験コーナーを設置し、インストラクターによる乗車指導の後、大勢の方がセグウェイを体験しました。

■同窓会、保護者等対象企画行事、施設公開

各学部・研究科の同窓会関係行事についても例年どおり行われました。講演会も多数開催され、同窓生だけでなく、在学生の保護者や一般市民の方々にも開放されました。そのほか、同窓会ならではの行事も数多く行われました。

また、教育・研究をはじめとする現在の本学の取り組みをご理解いただくため、保護者等を対象とした企画行事も開催されました。13の学部・研究科において、教育目標・教育課題、進路・就職状況等に関する説明や教員と保護者との面談形式での相談会など、部局ごとに趣向を凝らした行事が行われました。



保護者等対象企画行事に参加した方には、大学生協の無料食事券を配付し、日頃、学生が食べている食事を体験してもらいました。

さらに、超高圧電子顕微鏡施設、2008年ノーベル物理学賞・化学賞展示室、情報基盤センター、野依記念物質科学研究館ケミストリーギャラリー、赤崎記念研究館展示室では、施設公開や見学ツアーが開催され、参加者は、普段目にする事のない大学の設備、施設を興味深そうに見学していました。

1	2
3	

- 1 本のリユース市の様子
- 2 カルチャーショーの様子
- 3 セグウェイ乗車体験の様子

全学同窓会設立10周年記念行事を開催

全学同窓会設立10周年記念行事が、10月19日(金)、20日(土)の2日間、豊田講堂内の施設等において開催されました。これは、全学同窓会が平成14年10月27日(日)に設立されてから今年で10周年を迎えたことを記念し、第8回名古屋大学ホームカミングデイにあわせて開催されたものです。

ホームカミングデイ前日の19日(金)には、東山キャンパス内のレストラン花の木において、豊田章一郎全学同窓会会長をはじめとする同窓会役員、本学役員出席のもと、同窓会海外支部歓迎会が開催されました。久しぶりに母校を訪れた海外支部の代表者からは、本学で学んだことに変な誇りを持っているとのあいさつがあり、それぞれの近況や活躍の様子を紹介する良い機会となりました。

20日(土)には、ホームカミングデイの主要行事として開催された「名古屋大学の集い」で記念式典が挙行され、豊田会長、総長、伊藤義人全学同窓会代表幹事及び海外支部代表者全員が着用した本学アカデミックガウンが披露されました。本学アカデミックガウンの制定については、20年近く前より留学生から要請を受けていたものの、種々の



海外支部歓迎会での記念撮影

理由からこれまで実現に至っていませんでした。しかし、同窓会タイ支部長であるアピナン・スプラサート カセサート大学獣医学部長から、正式なアカデミックガウンを制定して欲しいとの強い要請があったため、タイ駐在の本学卒業生の協力を得てタイで試作されたガウンを正式なものとして制定しました。今回、全学同窓会設立10周年を記念して、同窓会からガウン15着が本学に贈られ、式典では、豊田会長から総長に目録が手渡されました。

引き続き、豊田会長から全ての同窓会海外支部長に、同窓会及び支部発展への貢献を賞して感謝状と記念品が贈られました。

また夜には、記念懇親会が開催され、約160名が出席しました。平成17年12月に設立されたタイ支部の支部旗が昨年7月の洪水で流されたため、改めて作製された支部旗が、平野前総長からアピナン タイ支部長に贈呈されました。現役の混声合唱団や応援団の出演もあり、賑やかな祝宴となりました。



アカデミックガウン寄贈目録の贈呈

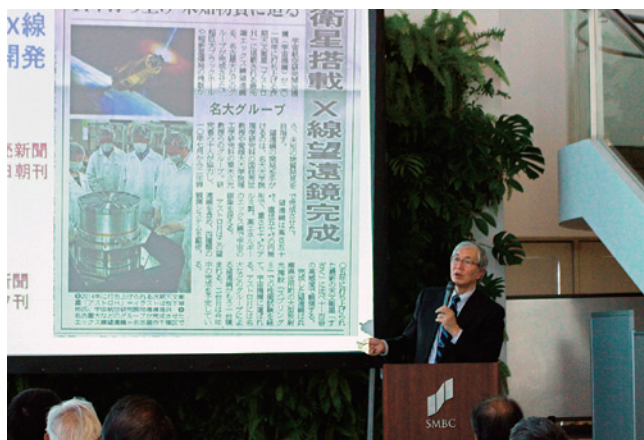


懇親会における応援団からのエール

あいちサイエンスフェスティバル2012を開催

あいちサイエンスフェスティバル2012が、9月29日(土)から11月4日(日)までの間、愛知県全域の各会場において開催されました。同フェスティバルは、愛知県内15機関からなる「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」の活動として昨年からのスタートした地域科学祭です。本学は、事務局を担うとともに、毎週土曜日に開催した市民向け講演会「先端技術と科学」全6回、及び平日に毎晩開催した「さかえサイエンストーク」全24回を運営しました。

今年度の同フェスティバルは、10月9日(火)から14日(日)までの間、ポートメッセなごや及び中部国際空港セントレアにおいて開催された国際航空宇宙展 JAPAN AEROSPACE2012 (JA2012) と連携して開催されました。初日の9月29日(土)は、名古屋で開発されている新型ジェット旅客機 MRJ の設計責任者である岸 信夫三菱航空機株式会社チーフエンジニア及び岩佐一志同営業部長が、三井住友銀行 SMBC パーク栄において、同フェスティバルの中心企画である市民向け講演会「先端技術と



講演する国枝副総長



質疑に応答する吉田サブ・チーフデザイナー（右端）とパイロット

科学」で講演しました。10月6日(土)には、鈴木伸夫東レ株式会社代表取締役副社長が、航空機材料を含む繊維材料について講演し、13日(土)には、中部国際空港セントレアホールにおいて、純国産ジェット機 T4 の開発に携わった吉田 茂川崎重工工業株式会社サブ・チーフデザイナーが講演し、質疑応答には航空自衛隊ブルーインパルスのパイロットも加わりました。

さらに、曜日替わりで三井住友銀行 SMBC パーク栄、名古屋テレビ塔、ジュンク堂書店ロフト名古屋店において開催した「さかえサイエンストーク」でも、第2、3週を JA2012 との連携週間と位置づけ、航空宇宙工学と物理・天文分野の研究者を集散的に招へいしました。「先端技術と科学」最終回の11月3日(土)には、國枝副総長が X 線天文学について講演し、JA2012 との連携を締めくくりました。このほか「先端技術と科学」では、10月20日(土)に故・外村 彰氏追悼シンポジウムが、27日(土)に清野 宏東京大学医科学研究所長による講演が行われました。

フェスティバルの第2拠点(三河部会)である蒲郡市生命の海科学館では、地球水循環研究センターが名古屋文理大学との共催で、「アノマロ宇宙へ行く！-宇宙(そら)から地球を見てみよう-」を開催し、スマートフォンを搭載したゴム気球を成層圏まで飛ばして地球を撮影し、その写真で同館での展示を制作する試みを、会期中5回シリーズで展開しました。本学はその他、リサーチ・アドミニストレーション室が主催した「名大カフェ」や、2000年にノーベル化学賞を受賞した白川英樹筑波大学名誉教授が直接指導する小中学生向け実験教室などを企画しました。

同フェスティバルは、独立行政法人科学技術振興機構の科学技術コミュニケーション推進事業に採択されて開催しており、今年度のフェスティバル終了後も、本学の事務局が主催してあいちサイエンスコミュニケーション・セミナーを開催するなど、来年度のフェスティバル開催に向けて、継続的に活動する予定です。

地震防災訓練を実施



農学ブロックにおける一斉避難訓練の様子

地震防災訓練が、11月8日(木)、東山地区、鶴舞地区、大幸地区、東郷地区、豊川地区、陶生地区、山手地区において実施されました。今年の実施は、すべての構成員を対象にした一斉避難訓練、ブロック自衛消防隊・建物自衛消防隊の初動訓練、災害対策本部の初動訓練を主要な項目として行いました。

一斉避難訓練では、東日本大震災における東北大学の避難状況などを参考に、建物ごとの1次避難場所を設定し、東山地区においては一斉避難訓練時間内の車両の入構、移動、出構を禁止し、緊急地震速報の放送から地震の揺れが収まるまでの間の安全姿勢の確保を強調するなど、新たな取り組みを行いました。参加者は全学で約1万名にのぼり、1次避難場所には昨年の2倍から3倍の学生・教職員が避難しましたが、「1次避難場所は今回は足りたが、最大の収容人員を想定すると狭い」、「出口付近の避難者を誘導しないと建物内の避難者が滞留してしまう」といった意見も出され、今後に向けた課題が明らかになりました。

ブロック自衛消防隊等の初動訓練は、ブロックに分割し



災害対策本部における初動訓練の様子

て再構築された大学の災害対応体制の確認とあわせて実施されました。今年で2年目ということもあって各ブロックの対応はかなり定着してきており、ブロック長を中心に、工作班が非常電源やLED照明器などブロック本部の非常用機器を設置し、指揮情報班がトランシーバーで本部や建物自衛消防隊と交信するなど、地震発生時におけるライフラインの途絶を想定した実際的な訓練が行われました。また、自衛消防隊員が専用のベストやヘルメットを着用し、活動を明確にしていました。

災害対策本部の初動訓練では、新しく整備された停電時にも使える全学放送設備やトランシーバーなどを活用し、ブロックの情報が逐一本部に報告され、本部からも情報、指示がブロックに流せる体制で行われました。本部自衛消防隊員が、停電を想定した自家発電機やLED照明などの設置、各ブロックとのトランシーバーや防災無線を使った交信、ブロックにおける想定被害情報の災害対策本部への報告などを行いました。災害対策本部には濱口総長をはじめとする災害対策本部員が集合し、各ブロックからの情報をもとに討議を行うなどの初動訓練を実施しました。

また今回は新たに、学内の専門家による体制として、施設管理部の建築技術職員と建築構造を専門とする教員による被災建築物の応急危険度判定センター、総合保健体育科学センターと環境医学研究所の医師、保健管理室のスタッフ及び本部職員による救護センターを組織し、それぞれ、緊急時のセンター開設訓練を実施しました。

本学は現在、防災体制の再構築を進めています。今回の訓練によって得られた貴重な経験やデータは、その取り組みに活かすとともに、来年度の地震防災訓練に反映します。

平成24年度世界トップレベル研究拠点プログラムに採択される

平成24年度世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)が選定され、本学が採択されました。

同プログラムは、平成19年度に文部科学省が開始した事業で、高いレベルの研究者を中核とした世界トップレベルの研究拠点の形成を目指す構想に対して政府が集中的な支援を行うことにより、システム改革の導入等の自主的な取り組みを促し、世界から第一線の研究者が集まる、優れた研究環境と高い研究水準を誇る「目に見える拠点」の構築を目指しています。

これまで国内で6つの拠点が採択され、同プログラムに採択されている「物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS)」の主任研究者である山中伸弥京都大学 iPS 細胞研究所長のノーベル賞受賞に代表されるように、既に一定の世界的な評価を得ています。

応募は15件 (13機関) あり、採択されたのは3件 (3機関) でした。(採択率20パーセント)

本学から採択された事業は以下のとおりです。

拠 点 名：トランスフォーマティブ生命分子研究所

拠 点 長：伊丹健一郎理学研究科教授

同研究所は、生命科学・技術を根底から変える革新的機能分子である「トランスフォーマティブ生命分子」を生み出すことにより食糧・バイオマス問題、イメージング技術、新しいバイオエネルギー等の分野でイノベーションを起こし、地球規模の問題解決に貢献することを目指します。

当初は、海外の研究者も含めて10名の主任研究者 (PI: Principal Investigator) がそれぞれチームを構成しますが、伊丹教授をはじめ、10名のPIが全て30代、40代 (平均年齢43歳) という若いチームです。

平成24年秋の叙勲受章者決まる

—本学関係者6名が喜びの受章—

平成24年秋の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

【叙勲】

【教育研究功労 関係】

瑞宝中綬章

内山 晋 名誉教授 (工)
元先端技術共同研究センター長
愛知工業大学特任教授

太田 博 名誉教授 (工)
元愛知工科大学学長

竹村 富男 名誉教授 (農)
元福井工業大学教授

藤井 省三 名誉教授 (工)
元大同大学教授

【文部行政事務功労 関係】

瑞宝双光章

木本 明男 元附属図書館事務部長
元甲子園大学図書課長
元プール学院大学事務局参事兼図書課長

【褒章】

紫綬褒章

村瀬 洋 大学院情報科学研究科教授

濱口総長が上海交通大学医学院60周年記念式典に出席

濱口総長は、10月24日(水)から28日(日)までの5日間、上海事務所長である宇田川幸則法学研究科教授とともに中国を訪問し、上海交通大学医学院60周年記念式典に出席しました。

上海交通大学は、AC21のメンバー校でもあり、毎年のように学長または副学長が互いの大学を往来しています。



チェン医学院長(右)への表敬訪問の様子

また、医学部においては学生間の交流もあり、同大学と本学とは強い結びつきがあります。

総長は、26日(金)、現地で合流した高橋医学系研究科長及び粕谷英樹医学系研究科准教授とともにオープニングセレモニーに出席し、その後、チェン・グォチアン上海交通大学医学院長を表敬訪問し、60周年記念に対する祝辞を述べました。その後、粕谷准教授が本学医学部を紹介するプレゼンテーションを行ったり、ブースにおいて医学部への留学について説明するなどし、非常に多くの医学院学生が本学のブースを訪れ、熱心に質問をしていました。

27日(土)には、上海文化劇場で行われた医学院創立60周年記念式典に出席し、夕方からは、上海の本学同窓会に出席して卒業生の中国における活躍ぶりに耳を傾け、昨今の日中情勢についても意見を交わしました。同窓会では、本学学生のホームステイ・ボランティアを引き受けていた出席者の方に対し、総長から感謝状と本学の写真集が手渡され、15年以上前に本学へ留学していた卒業生からは、留学当時と現在との建物外観の変貌ぶりに驚きの声が上がっていました。

また、中国滞在中の24日(水)には同済大学を、25日(木)には浙江大学を表敬訪問しました。

日本留学フェア2012を開催

日本留学フェア2012が、11月10日(土)、ウズベキスタンタシケントにおいて、ウズベキスタン・日本人材開発センターとの共催により開催されました。

同フェアは、国際化拠点整備事業(グローバル30)の一環として、ウズベキスタンに海外大学共同利用事務所を持つ本学が、ウズベキスタン文化・芸術フォーラム基金、ウ



開会あいさつをする渡辺理事

ズベキスタン高中等教育省、在ウズベキスタン日本大使館及び全学同窓会ウズベキスタン支部の協力を得て開催したもので、本学の他に、東北大、国際大、筑波大、早稲田大、慶応大、三重大、九州大、立命館アジア太平洋大の8大学が参加しました。また今年は、日本とウズベキスタンの国交樹立20周年目にあたり、その記念事業としても位置づけられました。

開会にともない、渡辺理事から日本側を代表してあいさつがあり、ウズベキスタン事務所が、本学のみならず広く日本国内の大学とウズベキスタンとの学生交流等を推進するために設置され、ウズベキスタンから日本へ留学する際の窓口としての重要な役割を担っていることなどの説明がありました。

当日は晴天に恵まれ、約1,200名の高校生・大学生、約40名の教育関係者、さらにはウズベキスタン国営放送をはじめとするテレビ等のメディア12社も来場し、大盛況のうちに終了しました。

同フェアを機に、より多くのウズベキスタンの学生が日本に興味を抱き留学することで、両国の一層の交流が促進されることが期待されます。

平成24年度日本数学コンクール表彰式を挙

平成24年度日本数学コンクール表彰式が、11月3日(土)、シンポジオンホールにおいて挙

行されました。今回は、受賞した生徒とその保護者等、約100名が出席

しました。表彰式では、濱口総長、日本数学コンクール委員会委員長を務めている國枝副総長、小島寿文愛知県教育委員会指



受賞者を囲んでの集合写真

導主事からあいさつがあった後、8月11日(土)に名古屋・大阪・三重・和歌山の4会場で行われた第23回日本数学コンクール、第16回日本ジュニア数学コンクールで優秀な成績を取めた46名、及び応募総数が78件にのぼった第13回日本数学コンクール論文賞で優秀な論文を作成した9組27名に対し、総長、國枝副総長らから賞状、メダル及び副賞が授与されました。

続いて、日本数学コンクールのシニア大賞、日本ジュニア数学コンクールのジュニア大賞、日本数学コンクール論文賞のシニア金賞、ジュニア金賞を受賞した生徒からそれぞれ受賞の喜びと感謝の言葉が述べられました。

表彰式終了後には、問題作成に携わったコンクール実行委員の教員が、問題に対する解答とそこに辿り着く過程や考え方について、生徒と会話しながらポスターセッション形式で解説をしました。

第38回経営協議会を開催

第38回経営協議会が、10月29日(月)、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からあいさつの後、総長に対する中間評価、職員給与規程等の一部改正、人事院勧告への対応等、平成24年度業務達成基準適用事業、執行部の職務分担等について、総長、各担当理事からそれぞれ説明が行われ、



会議の様子

審議の結果、了承されました。

次いで、平成25年度に実施する法科大学院認証評価(本評価)の申請手続き、平成23事業年度決算に係る財務分析、平成25年度概算要求、東郷自然観察園の設置、「石田賞」・「水田賞」の創設、平成24年度国際プログラム群入学試験の結果、第8回ホームカミングデイの実施について、報告が行われました。

外部委員の方々からは、学生の海外留学の促進、外部資金の獲得、大学の地域社会に対する貢献、財政状況及びメディア等を利用した基金等の計画に関して、貴重な意見が寄せられました。

なお、同日には第14回総長選考会議も開催され、教育研究評議会・経営協議会での審議結果を受けて、総長に対する中間評価が行われました。

複素力学系の「マルチバース」

大学院多元数理科学研究科准教授
川平 友規

「マルチバース」という言葉をご存知でしょうか。宇宙論の一説によると、そもそも宇宙というものは無数に存在していて、われわれの宇宙 (universe) もそのひとつに過ぎない、ということだそうです。すなわち「マルチバース」(multiverse) とは、この世が複数の宇宙から構成される、そのような世界観、いや「多世界観」を言うのであります。

聞きかじったところによりますと、このような「マルチバース」の考え方はいくつかバージョンがあって、たとえば「マルチバース」を構成する宇宙たちは必ずしも同一の物理法則にしたがう必要はないのだそうです。ある宇宙では、生物はおろか恒星すら存在できないほどに混沌としており、ある宇宙ではわれわれの宇宙のように、知的生命を育めるだけの秩序がある。そういう可能性が示唆されているのです。

私は数学者で物理学の門外漢ですが、この「マルチバース」の考え方を知ったとき、ストーン、と

腑に落ちるものがありました。私の研究する力学系理論の世界観、そのままだったからです。

かんたんな例をあげてみましょう。まず「空間」として実数全体、すなわち数直線をとります。つぎに適当な関数 $y = f(x)$ を決めて、「数直線上で x の位置にある点は、1秒後に $f(x)$ の位置に移動する」という「物理法則」を与えるのです (図1)。こうして得られる「宇宙」は力学系とよばれ、関数 $f(x)$ がある程度複雑であればカオス性を内在するシステムであることが知られています。これはいわば単一の「宇宙」ですが、さらに関数 $f(x)$ の係数を変化させれば、異なる「物理法則」にしたがう「宇宙」(力学系) が得られます。実際、力学系全体がカオス性をもつこともあれば、カオス部分が目に見えないほどに小さく、安定した秩序で満たされることもあります。関数の係数もつ自由度と同じだけ、無数の独立した「宇宙」が存在するのです。

さて私は力学系の中でも、「空間」を複素数全体に置き換え、「物理法則」も複素関数に換えた、「複素力学系」を研究しています。最先端の研究が予想するところによれば、カオス部分が目に見えるほど大きな複素力学系というのは、かなり少数派のようです。複素力学系の「マルチバース」に限っていえば、世界はおおむね秩序で満たされている、ということでしょうか。

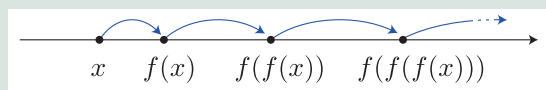


図1 数直線上の力学系。矢印は1秒ごとの点の動きを表現する。

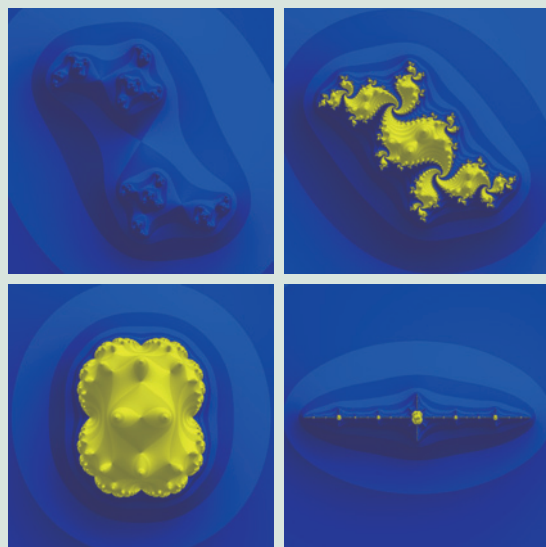


図2 複素2次関数による力学系は、複素平面にある種のポテンシャル関数を定める。青い海のような領域と黄色の陸のような領域の境界部分が力学系のカオス部分、ジュリア集合である。ジュリア集合は一般にフラクタル図形をなす。

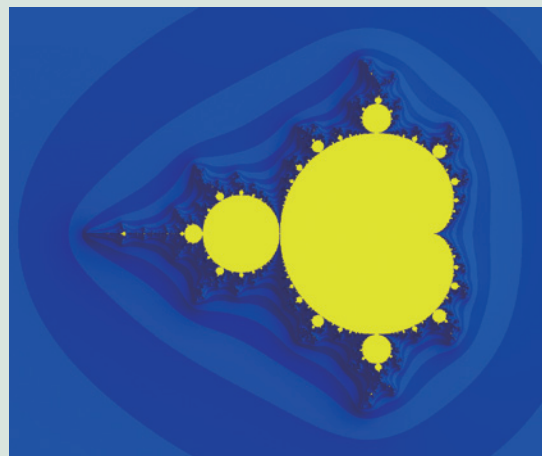


図3 マンデルブロー集合。複素2次関数による力学系の総カタログのような存在である。この集合には、「マルチバース」の重要な情報が記述されている。

材料の機能性発現のメカニズムにシンクロトン光で迫る

伊藤 孝寛 大学院工学研究科准教授

シンクロトン光は遠赤外からX線まで切れ目のない連続な光で、高輝度かつ偏光特性に優れていることから、実験室では得られない新しい分光測定を行うことを可能とする「夢の光」として近年注目されています。

われわれの研究グループは、財団法人科学技術交流財団が「知の拠点あいち」に整備をすすめている「中部シンクロトン光利用施設（仮称）」において、県・企業との協力のもとで超伝導や磁性などの特異な機能性を発現する材料の機能性メカニズム研究や有機・無機材料の電子・化学状態分析を目的とした装置の開発（図1）を行なっています。本稿では、シンクロトン光を利用することで初めて見るできるようになった材料の機能性を担う電子の状態を、新しい高温超伝導体として最近話題を集めている鉄系高温超伝導体における研究成果を例にとって紹介したいと思います。

超伝導材料は、医療機器（MRI）や高感度磁気測定装置（SQUID）として実用化されており、将来的に送電エネルギーロスの無い電線や、大電流の超高率な蓄電などを実現する上で最も有力な材料です。すなわち、超伝導材料における性能向上は将来のエネルギー問題を解決する切り札ともいっても過言ではありません。しかしながら、超伝導材料のデバイスとしての特性、特に高い超伝導温度を達成する条件については、実験・理論両面から研究が競争的に進められているにも関わらず不明な点が多いのが現状で

す。そんななかで、従来は超伝導の発現を阻害すると考えられてきた磁性体の典型例である鉄の化合物が非常に高い超伝導温度を示すというこれまでの常識をくつがえす結果が2008年に東京工業大学の細野秀雄教授らにより報告されました。このような化合物は鉄系高温超伝導体と呼ばれ、高温において超伝導が発現するメカニズムを本質的に明らかにする上で最も有力な系として世界中から注目を集めています。

超伝導を担う電子は、1972年にノーベル物理学賞を受賞したバーディーン、クーパー、シュリーファーにより提唱されたクーパー対と呼ばれる電子同士のペアを形成しており、クーパー対を形成する「のり」の役割をする本質的な相互作用が何かを明らかにすることが、超伝導のメカニズムを知る上で重要になります。鉄系高温超伝導体においては、スピン同士が交互に整列しようとする磁気的な相互作用（「スピン揺らぎの効果」）がクーパー対を形成する「のり」としてはたらくと予測されています。しかしながら、鉄系高温超伝導体は複数の電子軌道（Fe $3d_{xy}$ 、 $3d_{yz}$ 、 $3d_{xz}$ 、 $3d_{x^2-y^2}$ ：図3挿入図参照）が伝導特性を決定づけるフェルミ面を形成しているために、その理解が非常に複雑になっており、実験－理論のみならず、異なる実験手法の間でも矛盾があり、その基本的な電子状態の情報を詳細に明らかにすることが必要とされてきました。

材料に光をあてるとアインシュタインの光電効果により材料を構成している電子が材料表面から飛び出てきます。飛び出てきた電子は光電子と呼ばれ、そのエネルギーや放出角度を調べることで材料のバンド構造やフェルミ面といった材料の性質を決定づける電子の状態を実験的に決めることができます。このような分析手法は、角度分解光電子分光法（Angle-resolved photoemission spectroscopy: ARPES）と呼ばれ、計算では予測が困難な電子間相互作用が強い系（強相関電子系）における電子の状態を実験的に決定する上で最も強力な

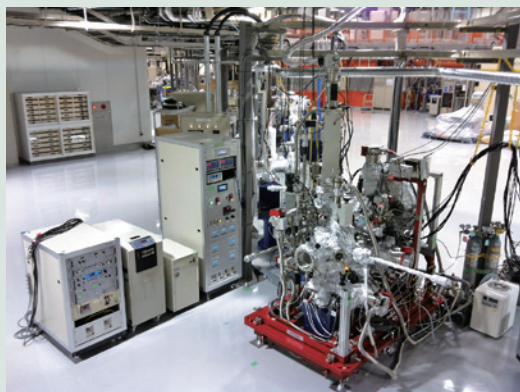


図1 中部シンクロトン光利用施設（仮称）の真空紫外軟X線ビームラインBL7Uに建設中の光電子分析装置。光電子分光や吸収分光などの測定により、材料中の電子状態の高精度評価や化学状態の定量分析をすることが可能になる予定です。本稿で紹介する研究成果は同様の装置を有する分子科学研究所 UVSOR 施設で得られたものですが、今後この装置を利用することで更に機能性メカニズム研究が進展することが期待されます。

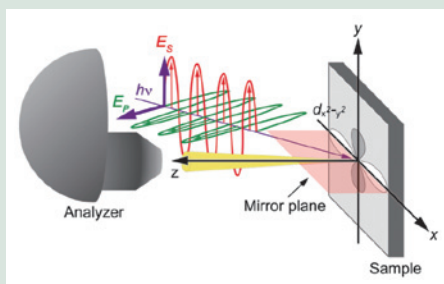


図2 シンクロトン光の偏光可変性を利用したARPES測定における実験配置の模式図。光の偏光方向によって強く観測される電子の軌道対称性が異なっていることを利用すると、バンド構造やフェルミ面を形成する電子の軌道対称性を区別することができます。

材料に光をあてるとアインシュタインの光電効果により材料を構成している電子が材料表面から飛び出てきます。飛び出てきた電子は光電子と呼ばれ、そのエネルギーや放出角度を調べることで材料のバンド構造やフェルミ面といった材料の性質を決定づける電子の状態を実験的に決めることができます。このような分析手法は、角度分解光電子分光法（Angle-resolved photoemission spectroscopy: ARPES）と呼ばれ、計算では予測が困難な電子間相互作用が強い系（強相関電子系）における電子の状態を実験的に決定する上で最も強力な

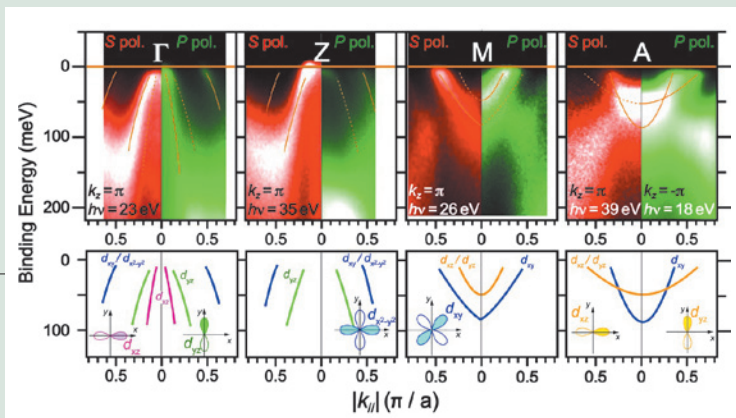


図3 ブリルアンゾーン中の対称点において ARPES 測定で観測された鉄系高温超伝導体 LiFeAs のバンド構造 (上図) とその模式図 (下図)。縦偏光 (S-pol.: 赤色イメージ) と横偏光 (P-pol.: 緑色イメージ) したシンクロトロン光を用いた場合を比較することでバンド構造の見え方が異なっていることが分かります。この結果から LiFeAs のバンド構造を形成する電子の軌道対称性をそれぞれ区別することができました。

手法として知られています。この手法にシンクロトロン光を用いる大きな利点はいろいろとありますが、特に重要なポイントとして、①縦方向や横方向に自由に偏光を変えられるため、電子状態を軌道対称性まで区別して決定することができることや、②電子を励起するエネルギーを連続的に変化させられるため、3次元的なブリルアンゾーン中の特定の点における情報を選択的に知ることができることなどがあげられます。このような利点を生かして、鉄系高温超伝導体において超伝導が発現するための本質的なメカニズムに迫ることを目的として、われわれの研究グループは鉄系高温超伝導体の中でも特に基本的な電子状態の情報が不足している LiFeAs という化合物に注目してシンクロトロン光角度分解光電子分光測定を行いました。

その結果、鉄系高温超伝導体 LiFeAs の電子状態それぞれのフェルミ面における軌道成分まで区別して特定することに初めて成功しました (図3)。例えば、ブリルアンゾーン中心 (Γ 、Z点) 付近では d_{xz} 、 d_{yz} 、 d_{xy}/d_{xz}^2 軌道からなる3枚のホール面が、ブリルアンゾーン境界 (M、A点) には d_{xy} 、 d_{yz}/d_{xz} 軌道からなる2枚の電子面が観測されていることが分かります。特に、 d_{xy} という斜め方向に伸びる軌道によるホール面が Γ 点に観測されたことから、この系における超伝導メカニズムの理解において d_{xy} 軌道間の散乱が重要な役割を果たしていることが明らかになりました (図4)。さらに、詳細な測定結果と中性子散乱などの実験結果や理論的な予測を比較・検討をすすめたところ、このような散乱は「スピンの揺らぎの効果」を強くするはたらきがあることが分かってきました。

このように、材料の特性を決定づける電子の状態をシンクロトロン光を利用した分光手法で様々な方向から観察することで、材料の役立つ機能性

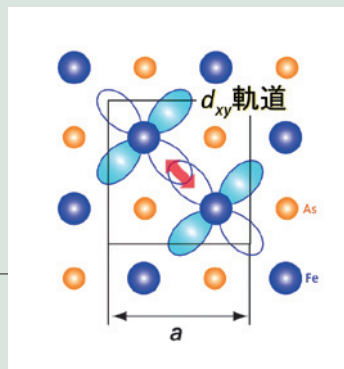


図4 鉄系高温超伝導体 LiFeAs の超伝導が発現するメカニズムの模式図。 d_{xy} 軌道と呼ばれる斜め方向に伸びた軌道の間で強い散乱が起こることが分かったことで、「スピンの揺らぎの効果」が高温超伝導の発現に重要であることが明らかになりました。

を生み出す原点が何であるか、ということが次第に明らかになってきています。身の回りで性能の向上を目指している材料はいくらでもあります。が、「性質を生み出すしくみ」まで理解できている材料は実はほとんどないのが現状です。そんな中で、われわれが取り組んでいる機能性メカニズム研究は、材料各々がもつ性質を格段に向上させるためのきっかけを与える重要なシーズになると考えられます。われわれの研究グループでは今後も、超伝導、磁性体を初めとした機能性材料を中心にすえつつ広い視野にたって、シンクロトロン光を利用した新たな「モノづくり」分野を開拓していきたいと思っています。

最後に、本稿で紹介した鉄系超伝導体に関する研究成果は、分子科学研究所 UVSOR 施設のビームラインを利用したもので、2012年3月19日に米国フィジカル・レビュー B に掲載されました (Physical Review B85 (2012) 094509)。羽尻哲也君 (博士課程後期課程2年) を初めとする共同研究者の皆様の努力に感謝します。

シンクロトロン光：ほぼ光速で直進する電子が磁場などにより進行方向を変えられた際に発生する光。太陽光のように赤外線から X 線まで広い波長の光を含んでおり、高強度、高指向性などの優れた性質をもつ。シンクロトロン放射光、放射光とも呼ばれる。

1975年秋田生まれ。1997年3月東北大学理学部卒、2002年3月東北大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了 (博士 (理学))。理化学研究所播磨研究所連携研究員、2003年4月より分子科学研究所極端紫外光研究施設助教 (助手) を経て、2009年4月より現職。同じく、名古屋大学シンクロトロン光研究センター准教授 (兼任)。専門：光物性科学、シンクロトロン光応用工学
趣味：読書、ジャズ鑑賞、演奏

いとう たかひろ



第5回2012高校生向けセミナーを開催

●大学院法学研究科

大学院法学研究科は、11月10日(土)、法政国際教育協力研究センター2階のCALEフォーラムにおいて、第5回2012高校生向けセミナー「ASIA－アジアの法と社会について考えよう！－」を開催しました。

同セミナーは、高校生にアジアの法と社会について学ぶ機会を提供することで将来の進路選択の参考にしてもらう



グループディスカッションの様子

ことを目的としています。今回は、日中韓による人材育成を目指したキャンパス・アジア事業が法学部で始まったことを受けて、高校生に、中国、韓国について見識を深め、両国からの留学生及び本学法学部の学生とともに東アジアの将来について考えてもらうことに主眼を置きました。

午前の部では、宇田川幸則法学研究科教授が「中国の法と社会」について、李正吉同研究科特任講師が「韓国の政治と社会」について講演を行いました。午後の部では、学生が主体となって、中国、韓国の紹介、両国に留学中の学生とのテレビ会議を用いた質疑応答、及びグループディスカッションを行いました。どの場面でも高校生が積極的に発言をし、教員や学生・留学生に熱心に質問をしている姿が見受けられました。セミナー終盤には、宇田川教授から「本当に素晴らしいセミナーでした」との講評があり、定形同研究科長からは高校生全員へ「未来博士号」が授与されました。

参加した高校生からは中国、韓国について深く知ることが出来て良かったとの声が聞かれ、漠然としたイメージはあるものの良くは知らない両国について、法や政治という面から知る良い契機となったようです。

第27回国際学術シンポジウムを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、10月26日(金)、文系総合館カンファレンスホールにおいて、第27回国際学術シンポジウム「新たな転換期の国際経済－グローバル化・自由化と所得不平等」を開催しました。

初めに、鮎京理事と木村経済学研究科長から講演への期待を込めたあいさつがあった後、世界銀行開発研究グルー



鮎京理事によるあいさつの様子

プシニア統計学者のチェン・ショウファー氏が基調講演を行いました。世界銀行の貧困基準を提案したチェン氏は、世界的な絶対貧困の低下と相対貧困の増加の併存を指摘し、今後の貧困対策は相対貧困に重点をおくべきと話しました。続いて、経済協力開発機構(OECD)シニアエコノミストのイサベル・コスケイ氏が基調講演を行い、OECDの事例をひいて、経済成長と所得格差を両立させる政策を検討しました。

次いで、王小魯 中国改革基金会国民経済研究所副所長、張車偉 中国社会科学院人口労働経済研究所副所長、張翼 中国社会科学院社会学研究所副所長、サムチャイ・ジツチョン タイ開発研究所研究部長、金昌男 韓国東亜大学校経済学科教授の各氏が講演し、それぞれ中国、韓国、タイの経済発展におけるグレー所得と政治腐敗、中所得の罍、労働移動と所得格差、賃金上昇の経済への影響について話しました。薛進軍国際経済政策研究センター教授は、これらの問題は新たな転換期に向かう世界経済の共通問題であるとし、今後の包括的な対応の必要性を強調しました。

会場では多数の研究者、学生、一般の方々が熱心に聴講し、活発な質問がありました。最後に、多和田同センター長からお礼のあいさつがあり、閉会しました。

第15回名古屋ビジネスセミナーを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、11月13日(火)、日本経済新聞社名古屋支社会議室において、経済学部同窓会である社団法人キタン会との共催により、第15回名古屋ビジネスセミナーを開催しました。同セミナーは、大学院経済学研究科と緊密に協力しつつ領域横断型の研究を開拓し、その成果を広く社会に還元すること



講演する榎田支店長

を任務とする同センターが、地域に開かれた研究活動を推進するため開催しているもので、今回は、榎田誠希日本銀行名古屋支店長を講師として迎えました。

佐藤宜之国際経済政策研究センター教授の司会のもと、木村経済学研究科長による開会あいさつに続いて、榎田支店長より「最近の金融経済情勢について」と題して講演がありました。榎田支店長は、70名近い聴衆を前に、国内の生産・輸出・設備投資・消費・雇用等の動向に加え、最近の欧州債務問題、米国・中国の経済動向、更にはデフレ脱却に向けた日本銀行の最近の取り組みについて、ユーモアも交えながらわかりやすく説明しました。特に当地経済に関連して、エコカー補助金終了後の反動減は短いのではないか、住宅・個人消費など自動車以外の内需には一定の底堅さがあるのではないか、自動車の輸出先となる海外経済は来年度以降緩やかな回復が期待されるのではないかといった説明があり、聴衆の関心をひいていました。最後に、多和田同センター長が閉会あいさつを行い、終了しました。

アンケートからは聴衆の高い関心がうかがわれ、今後も、時宜にかなったテーマのもと、定期的に、産学官の幅広い分野の講師を募って開催する予定です。

国際シンポジウム「教育分野におけるアジア新興ドナーと日本」を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、10月25日(木)、独立行政法人国際協力機構(JICA)研究所国際会議場において、JICA研究所との共催により、国際シンポジウム「教育分野におけるアジア新興ドナーと日本」を開催しました。これは、科学研究費補助金「発展途上国教育研究の再構築」(基盤 A)の最終年度の成果発信活動の一環として実施したものです。



パネルディスカッションの様子

発展途上国への支援は、従来、欧米先進国や日本による関与にほぼ限定されてきましたが、近年、新興国の急速な経済成長に伴い、被援助国だった国々が援助国(ドナー)に転換してきています。特にアジアは、中国、インド、韓国など新興ドナーがひしめいており、従来の援助国間の合意や理念に囚われない新興ドナーの増加により、援助のパラダイムシフトも示唆されています。社会の発展における「人づくり」(教育)の役割をどう捉えるかは、ドナー国の国際協力の在り方に如実に反映されます。そこで、今回のシンポジウムでは、教育分野の国際協力に焦点を当て、新興ドナーと日本をつなぐアジアらしさとは何かを議論しました。

シンポジウムには150名近くが参加し、山田肖子国際開発研究科准教授がモデレータを務め、パネリストとして迎えたチュン・ボングン ソウル大学教授、ティラク・ジャンディラ インド国立教育計画行政大学教授、アーマッド・アブドゥル・ラザク マレーシア国立防衛大学准教授、モク・カーホ香港教育学院教授、結城貴子 JICA 研究所研究員が活発な議論を交わしました。聴衆からも意見が出されるなど、今後の議論の展開も期待させる形で閉会しました。

創薬科学研究科創設記念行事を挙げる

●大学院創薬科学研究科



記念式典の様子

大学院創薬科学研究科は、11月9日(金)、理学南館大講堂(坂田・平田ホール)及び豊田講堂シンポジオンホール等において同研究科創設記念行事を開催しました。同行事は、同研究科が本学においては平成15年以来となる新たな研究科として、今年4月に設立されたことを記念して開催されたものです。

第1部の記念講演会では、初めに、松下創薬科学研究科長があいさつを行いました。続いて、福山 透同研究科教授が「創薬に貢献する有機合成化学」と題し、藤吉細胞生理学研究センター長が「構造に指南された創薬戦略」と題してそれぞれ講演を行い、天然物化学、有機合成化学、生命科学の分野における最先端の研究成果について、わかりやすく説明しました。招待者、本学教職員、学生など220名を超える参加者がつめかけ、同研究科への高い関心がうかがわれました。

続く第2部の記念式典では、濱口総長があいさつを行い、続いて、来賓として、村田善則文部科学省高等教育局医学教育課長及び前総長である平野眞一上海交通大学講席

教授より祝辞がありました。

また式典の最後には、松下研究科長より、同研究科創設にあたっての関係各者への感謝の言葉と、今後の抱負が述べられました。文部科学省関係者、東海・北陸地区薬学部関係者及び製薬企業関係者をはじめとした約120名が出席し、本学の基礎研究力の実績を十分に活用した、独自の横断的な多分野融合創薬科学教育・研究に対する強い期待が感じられました。

また、第3部として記念式典終了後に行われた記念祝賀会では、記念式典出席者と同研究科教職員、学生とが交流する姿が見られ、本学に誕生した新たな薬学教育拠点の創設を祝して、盛況のうちに終了しました。



講演する福山教授



講演する藤吉センター長

ICCAE 2012年度第3回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、10月17日（水）農学部第2講義室において、2012年度第3回オープンセミナーを開催しました。ICCAE 外国人客員研究員であるジョン・キマニ ケニア国立農業研究所上席研究員を講師として迎えた今回は、「ネリカの穂ばらみ期耐冷性に関する量的形質座位（QTL）解析および有望系統の選抜



講演するキマニ上席研究員

と題し、ICCAE 在任中に取り組んだ研究の成果を中心に報告がありました。

ケニアでは、国内消費量が急増しているコメの増産が重要課題となっていますが、イネの栽培面積拡大が期待されている同国の高地では、雨季後半の気温低下によって不稔粉が発生する障害型冷害が問題となっています。

キマニ上席研究員は、ケニアで普及が進められているネリカ品種や同国のイネ品種など約30品種の耐冷性を評価し、耐冷性程度の異なるこれらの品種は、耐冷性イネ品種の開発に必要な不可欠な耐冷性評価用基準品種として利用可能であることを示しました。また、日本の耐冷性品種「はなの舞」とネリカの親品種である「WAB56-104」との交配後代系統を用いて、それぞれの品種に由来する耐冷性関連QTLを両方とも持つ系統の耐冷性が強く、これらが耐冷性育種素材として有望であることを示し、さらに、ケニア向け耐冷性品種の開発に向け、新たに熱帯ジャポニカ型や日本型の耐冷性品種とケニアのイネ品種を交配したことを報告しました。

これを受け、低温障害発生メカニズムや同国における耐冷性イネ育種の進め方について活発な意見交換が行われました。

ICCAE 国際シンポジウムを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、11月9日（金）、東京都内のエッサム本社ビルにおいて、国際シンポジウム「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人研究者の育成の現状と課題」を開催しました。これは、農林水産省の委託を受けた事業の一環として開催されたもので、ICCAE 第13回オープンフォーラムとしても位置づけられました。



集合写真

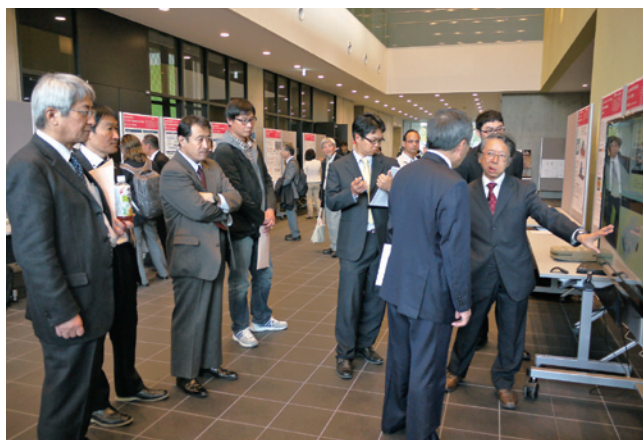
同シンポジウムは、地球規模の課題の解決を目的とする農林水産研究分野において日本人のプレゼンスを高めるための方策や、そのための人材育成の方向性について議論することを目的としており、国際農林水産業研究センター、国際協力機構、大学、東南アジア農学高等教育研究地域センター（SEARCA）、カタギ食品株式会社の代表者が、各々の立場から、日本人研究者に求められる資質・能力及び人材育成の取り組みについて報告を行いました。

エディサ・セディコー SEARCA 大学院奨学金部長からは、国際農業研究の現場では日本人はごく少数であること、世界には研究職に限らず、研究支援者、農業者など様々なキャリアがあることが報告され、高田直幸カタギ食品株式会社代表取締役社長からは、基礎研究だけでなく、社会貢献的な性格を持った応用研究や技術支援または技術移転に活躍の場があること、現在の評価方法や身分保障にも問題があることが指摘されました。パネルディスカッションでは、聴衆からも多くの意見が出されました。海外に興味がある学生に、いかに現場の面白さを体験させ興味を持たせて研究者として育てるかが大事で、その方策を講じるべきとの方向性が明らかになりました。

グリーンモビリティ連携研究センター設立1周年記念式典を挙げる

●グリーンモビリティ連携研究センター

グリーンモビリティ連携研究センターは、11月7日(水)、ES総合館において、同センター設立1周年記念式典を挙行しました。同センターは、環境への負担が少なく、安全かつ安心な交通手段及び交通システムを意味する「グリーンモビリティ」に関するイノベーションの実現に向け、産学・国際連携のもと、革新的技術を創出するための研究開



成果発表会の様子

発の促進と当該分野を先導する研究者の人材育成を図ることを目的として昨年設立され、今年7月で設立1周年を迎えました。

式典では、小野木グリーンモビリティ連携研究センター長が式辞を、濱口総長があいさつを述べた後、内山田竹志トヨタ自動車株式会社代表取締役副会長から来賓あいさつがありました。その後、小野木センター長から、センター設立の経緯やこれまでの活動、成果などについて報告がありました。

式典終了後には、この1年の成果発表として、センター所属の研究室によるポスター発表や、センサーデバイスを搭載した車両、次世代パーソナルモビリティ「コムス」、「セグウェイ」の展示や試乗会も行われ、関係研究者や一般来場者と白熱した議論が展開されました。

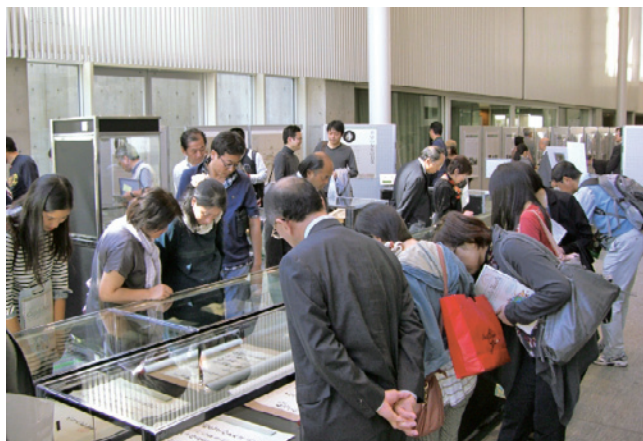
その後の記念講演会では、鈴置工学研究科長及び田中エコトピア科学研究所長があいさつを述べた後、深谷信介株式会社博報堂次世代電動生活ラボリーダーが「これからのモビリティと暮らし」と題し、今後のスマート社会に伴う暮らしや街づくりに関して講演しました。

学内外から177名が参加し、大盛況のうちに終了しました。

2012年秋季特別展「時を超える贈り物」を開催

●附属図書館

附属図書館及び同館研究開発室は、10月23日(火)から11月6日(火)までの間、同館4階展示室において、2012年秋季特別展「時を超える贈り物－世界のなかの日本、日本のなかの世界－」を開催しました。同展は、10月20日(土)、豊田講堂アトリウムにおいて、ホームカミングデイ特別企画としても開催し、一般市民や本学卒業生等、会期中合わ



展示に見入る来場者の様子

せて900名近い来場者がありました。

今回の展示会では、本学が所蔵する貴重書のうち、一般に広く知られている「解体新書」、「国富論」等の資料や、東海地区に伝わる高木家文書等の文書計45点を、6つのパートに分けて紹介しました。特に文書のパートでは、高木家文書の「御用日記」等に記された地震・津波の災害記録から、現在、未来へのメッセージを読み解く展示内容としました。

また、ホームカミングデイ当日は、展示資料に関連して、大塚雄太高等研究院特任助教が西洋の社会思想史について、附属図書館研究開発室員である石川寛文学研究科特任准教授が文書に記された地震・津波記録について、それぞれギャラリートークを行いました。

来場者からは、「本学にこのような資料があるとは知らなかった」、「写真でしか見たことのなかった書物の実物を見ることができて感激した」等の声が寄せられ、好評のうちに終了しました。

ミクロの探検隊を開催

●博物館



説明を受ける様子

博物館は、10月20日(土)、同館展示室において、ミクロの探検隊を開催しました。これは、同日に行われたホームカミングデイにあわせて開催されたものです。

参加者は、まず、用意した実体(光学)顕微鏡6台を使い、あらかじめ観察園から採集してきたアリや植物を各自観察しました。実体顕微鏡で観察することが初めてだった方が多く、実体顕微鏡下の世界に興味深く見入っていました。

続いて、光学顕微鏡との機能の違いや原理の説明を受けた後、電子顕微鏡での観察が始まり、倍率が上がっていく様子に歓声をあげていました。また、植物のグミやウツギは、花やヒトデのように見える毛を持っていることや、アリの顎先が反射電子で白く見えるのは、含まれている亜鉛のためということ電子顕微鏡での観察を通じて実感していました。

ミクロの世界を通して自然の一端を知る今回の機会から、本学を身近に感じる機会となったようでした。

第3回地球教室を開催

●博物館



木曽川の河原で見られる岩石について説明を受ける参加者

博物館は、10月27日(土)、28日(日)の2日間、木曽川の河原において、名古屋市科学館との共催で、第3回地球教室「河原の石で包丁をつくろう!」を開催しました。今回の内容は、日本学術振興会の「ひらめき☆ときめきサイエンス」に採択され、助成を受けて行われたもので、小中学生とその保護者を含む20名が参加しました。

1日目は、岩石について学習し、木曽川の河原でチャートの露頭や河原石の観察を行いました。続いて、こうした地質学的内容を人文的側面に関連づけ、総合的な学習を実践するために、石で包丁を作る体験をしました。石の包丁を作るには適した石材を選択する必要があります。科学的な知識を学ぶ一方で、石器を作る体験を通して、岩石の種類や性質の違いを体感しました。

2日目は、製作した石器を使って肉や野菜を切り、調理を行いました。参加者は、地学と考古学の両方に関わる文化体験を楽しんだようでした。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 朝日地球環境フォーラム2012開催:15、16日 1日目全体会議で益川敏英本学特別教授が「エコばなし スローライフでノーベル賞」と題し対談	10.16 (火)	朝日 (朝刊)
2 第24回博物館企画展「西條八束と日本陸水学の流れ」開催:9月11日～11月10日 諏訪兼位本学名誉教授が解説	10.16 (火)	朝日 (朝刊)
3 現代日本誤百科 (696):「カードはバスにもご利用できます」町田 健文学研究科教授	10.16 (火)	中日 (朝刊)
4 平石賢二教育発達科学研究科教授が愛知県教育委員会の新委員長に選ばれる	10.16 (火)	朝日 (朝刊)
5 第11回愛知学生サッカーリーグ戦2部リーグ:14日 医学部サッカー部が2-0で中京大学Bに勝利	10.16 (火)	読売
6 東海テレビ杯平成24年度秋季第71回東海地区大学(男子)ソフトボールリーグ戦大会:14日 ソフトボール部が1試合目2-14で中京学院大学に敗れ、2試合目5-14で愛知学院大学に敗れる	10.16 (火)	朝日 (朝刊)
7 石浦正寛遺伝子実験施設教授と松尾拓哉助教はクラミドモナスの生物時計の遺伝子を発見	10.16 (火)	中部経済新聞
8 澤 博工学研究科教授は株式会社小糸製作所などと共にまぶしさを抑えた新しい白色LEDを開発	10.17 (水)	中日 (朝刊) 他2社
9 松本邦弘理学研究科教授や久本直毅同准教授などのグループは脳内マリファナが切断された神経の線の再生を阻害することを発見	10.17 (水)	中日 (朝刊) 毎日 (夕刊)
10 現代日本誤百科 (697):「政権への致命傷」町田 健文学研究科教授	10.17 (水)	中日 (朝刊)
11 第24回博物館企画展「西條八束と日本陸水学の流れ」開催:9月11日～11月10日	10.17 (水) 10.31 (水)	朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
12 現代日本誤百科 (698):「悔いなくやる」町田 健文学研究科教授	10.18 (木)	中日 (朝刊)
13 平成24年度東海学生ラグビーリーグ A2:ラグビー部が29-0で日本福祉大学に勝利	10.18 (木)	中日 (朝刊)
14 第30回名古屋レガッタ2012:エイト 1位、男子舵手付きフォア 2位、男子シングルスカル 1位山田さん本学学生、女子ダブルスカル 1位本学B、2位本学A、女子シングルスカル 1位関根さん本学学生、2位林さん本学学生	10.18 (木)	中日 (朝刊)
15 訃報:西村 融本学名誉教授	10.18 (木)	中日 (朝刊) 読売
16 市民公開講座-腎臓病・糖尿病とともに生きる-開催:9月22日 松尾清一医学部附属病院長が開会のあいさつ、丸山彰一医学系研究科准教授と鈴木富夫医学部附属病院栄養管理部副部長が講演	10.18 (木)	朝日 (朝刊)
17 本学も研究を進めている東京電力福島第一原子力発電所の事故で溶けた燃料の位置を知る方法について、米国ロスアラモス国立研究所は素粒子の散乱現象を使い正確に知る方法を開発したと発表	10.18 (木)	中日 (夕刊)
18 大平英樹環境学研究科教授が温泉に入ることのでられる効果について解説	10.18 (木)	朝日 (夕刊)
19 第24回博物館企画展「西條八束と日本陸水学の流れ」特別講演会開催:20日 諏訪兼位本学名誉教授が故西條八束同名誉教授とご尊父の故西條八十氏との思い出を講演	10.18 (木) 10.21 (日)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
20 The Center of Technology -ものづくり中部の明日を考える-シンポジウム開催:11月4日 鈴置保雄工学研究科教授がパネルディスカッションに参加	10.18 (木) 10.23 (火) 10.24 (水) 10.25 (木) 11. 5 (月)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊) 中日 (朝刊) 中日 (夕刊) 中日 (朝刊)
21 秩父宮賜杯第44回全日本大学駅伝対校選手権大会:11月4日 本学が出場	10.18 (木)	朝日 (朝刊)
22 北川浩之環境学研究科教授と英国ニューカッスル大学などの国際研究チームは放射性炭素年代測定の精度を大幅に改善することに成功	10.19 (金)	中日 (朝刊) 日刊工業
23 朝日カルチャーセンター新講座:21日「紫式部と『源氏物語』の絵画」高橋 亨本学名誉教授	10.19 (金)	朝日 (朝刊)
24 本学と中日本高速道路株式会社が橋梁の研究施設「N2U-BRIDGE (ニュー・ブリッジ)」で研修を開始	10.19 (金)	中日 (朝刊)
25 書籍:「いまだから伝えたい戦時下のこと-大学教員の戦争体験記-」益川敏英本学特別教授と諏訪兼位同名誉教授ほか著	10.20 (土)	読売
26 トヨタ博物館特別企画展「TOYOTA75」開催:20日～2013年4月14日 豊田章一郎全学同窓会会長の話	10.20 (土)	毎日 (朝刊)
27 ニュートン著「プリンキピア」第2版(1713年出版)特別展示:18日～25日 ES総合館2階2008年ノーベル賞展示室	10.20 (土)	中日 (朝刊)
28 数理ウェブ開催:27日	10.20 (土)	中日 (朝刊)
29 第8回名古屋大学ホームカミングデー開催:20日 駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生が講演	10.20 (土) 10.21 (日)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊) 読売
30 上出洋介本学名誉教授などのグループは太陽の黒点数が最大になると磁場が反転することを明らかにした	10.21 (日)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
31 室原豊明医学系研究科教授と坂東泰子医学部附属病院講師は糖尿病の合併症である拡張不全型心不全が引き起こされる仕組みの一端を解明	10.21 (日)	中日 (朝刊)
32 東海経済討論:TPP参加に賛成? 慎重? 生源寺真一生命農学研究科教授	10.21 (日)	朝日 (朝刊)
33 石原一彰工学研究科教授は東京の地下鉄車内でアルミ缶が破裂した事故について「(強アルカリ性洗剤を)酸やアルカリ金属と一緒にしてはいけない」と話す	10.21 (日)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
34 書籍：『『大発見』の思考法』益川敏英本学特別教授著、京都大学教授山中伸弥氏著	10.21 (日)	中日 (朝刊)
35 現代日本誤百科 (699)：「めった打ちに殺害」町田 健文学研究科教授	10.22 (月)	中日 (朝刊)
36 数理科学同窓会第1回学生奨励賞 (飛田賞) 授与式開催：20日 信州大学助教和田堅太郎氏が受賞	10.23 (火)	中日 (朝刊)
37 現代日本誤百科 (700)：「自宅を不法侵入された」町田 健文学研究科教授	10.23 (火)	中日 (朝刊)
38 清水裕之環境学研究科教授が愛知芸術文化センター開館20年について話す	10.23 (火)	朝日 (朝刊)
39 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ① 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	10.23 (火)	朝日 (朝刊)
40 第11回愛知学生サッカーリーグ戦2部リーグ：医学部サッカー部が1-2で名古屋経済大学に敗れる	10.23 (火)	読売
41 山岡耕春環境学研究科教授はイタリアで地震発生直前に安全宣言をだした学者や政府関係者が有罪判決になったことに対し「本来科学者の議論は自由であるべきなのにそれが阻害されてしまう」と語る	10.23 (火) 10.24 (水)	朝日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
42 鈴木康弘減災連携研究センター教授は、原子力発電所に影響を与える活断層定義の厳格化について「40万年前まで遡って調べれば見落としていた活断層が見つかることも考えられる」と語る	10.24 (水)	中日 (朝刊)
43 従四位瑞宝小綬章：黒田義浩本学名誉教授	10.24 (水)	読売 中日 (朝刊)
44 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ② 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	10.24 (水)	朝日 (朝刊)
45 第26回 spcafé「臨床環境学への挑戦」開催：30日 高野雅夫環境学研究科准教授が講演	10.24 (水)	中日 (朝刊)
46 足立 守博物館特任教授が「芸術は、科学的な発見に深く関係している」と考え発表した本学のキャンパス・ミュージアム構想について紹介	10.24 (木)	中日 (夕刊)
47 秩父宮賜杯第44回全日本大学駅伝対校選手権大会：11月4日 陸上競技部の選手が株式会社朝日新聞社名古屋本社を訪問	10.25 (木)	朝日 (朝刊)
48 山澤弘実工学研究科教授は原子力規制委員会が公表した放射性物質拡散予測について「多かれ少なかれ放射性物質の影響は半径30キロを超える。それを念頭に避難計画を作るべきだ」と語る	10.25 (木)	読売
49 井口哲夫工学研究科教授は放射性物質拡散予測について「地域の具体的な防災の対策に生かすためには課題が多く残っている」と語る	10.25 (木)	朝日 (朝刊)
50 第5回プラズマ技術産業応用センター (PLACIA) & プラズマが拓くものづくり研究会 (PLAM) 国際シンポジウム開催：24日 堀 勝工学研究科教授が基調講演	10.25 (木)	中日 (朝刊)
51 本学と株式会社富士通システムズ・ウエストは次世代電子カルテシステムの共同研究を開始	10.25 (木)	日刊工業
52 現代日本誤百科 (702)：これまで「経験したことのない大雨」町田 健文学研究科教授	10.25 (木)	中日 (朝刊)
53 天声人語：イタリアの地震で安全宣言が被害を広げたとして過失致死罪に問われた学者や政府関係者が有罪判決になった裁判についての山岡耕春環境学研究科教授の発言が参照される	10.25 (木)	朝日 (朝刊)
54 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ③ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	10.25 (木)	朝日 (朝刊)
55 秩父宮賜杯第44回全日本大学駅伝対校選手権大会：11月4日 本学陸上部を紹介	10.25 (木) 11. 3 (日) 11. 5 (月)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
56 山本誠一医学系研究科教授と大阪大学などは高分解能小動物用 PET と MRI 一体型撮像装置の開発に成功	10.26 (金)	日刊工業
57 ナビゲーター：豊田章一郎全学同窓会会長	10.26 (金)	日刊工業
58 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ④ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	10.26 (金)	朝日 (朝刊)
59 第44回中日教育賞贈呈式開催：26日 早川 操教育発達科学研究科教授が受賞者を祝う	10.26 (金)	中日 (夕刊)
60 本学を含む国立19大学の教員が民間から受け取った寄付金を会計に計上していない内規違反があったことが分かる	10.27 (土)	朝日 (朝刊)
61 豊田講堂にてピンクリボンシンポジウム2012 in Nagoya 開催：14日 若林俊彦医学系研究科教授が講演	10.27 (土)	朝日 (朝刊)
62 人類をとりまく究極の災害：永井美之本学名誉教授が H5N1型の新型インフルエンザについて話す	10.27 (土)	東京 (朝刊)
63 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ⑤ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	10.27 (土)	朝日 (朝刊)
64 鷺谷 威減災連携研究センター教授が日本海東縁ひずみ集中帯について語る	10.28 (日)	読売
65 瀧口総長と中部大学総長飯吉厚夫氏が持続発展教育 (ESD) について対談	10.28 (日)	朝日 (朝刊)
66 ドナルド・マクドナルド・ハウス などや建設支援	10.28 (日)	朝日 (朝刊)
67 現代日本誤百科 (703)：「催しにはグッドタイミング」町田 健文学研究科教授	10.29 (月)	中日 (朝刊)
68 附属図書館医学部分館第2回ミニ展示「ノートの中の青春 ミニ展示会記号ー講義ノートが伝える医学生の歩みー」開催：23日～1月18日	10.29 (月)	中日 (朝刊)
69 海外メディア：春名幹男国際言語文化研究科客員教授が米国大統領選挙について解説	10.29 (月)	読売
70 磯部健一医学系研究科教授や大磯ユタカ同教授らのグループが老化したマウスの骨髄から作製した iPS 細胞を使って糖尿病の合併症を減らすことに成功	10.30 (火)	中日 (朝刊)
71 丹羽利充医学系研究科寄附講座教授が編集した腎不全で血中にたまる老廃物をテーマにした教科書が米国で出版される	10.30 (火)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
72 法学研究科附属法情報研究センターが地方自治体の条例作成を支援するシステムを開発しインターネットで公開が開始される	10.30 (火)	読売
73 水谷法美工学研究科教授が委員長を務める国土交通省中部地方整備局の防波堤耐津波性能評価委員会は名古屋港の高潮防波堤を最大3メートルかさ上げし海面から8メートルに改修することを決定	10.30 (火)	読売
74 朝日地球環境フォーラム2012開催：15、16日 パネル討論「環境技術で明日の日本を元気に」トヨタ自動車副会長内山田竹志氏本学卒業生	10.30 (火)	朝日 (朝刊)
75 ひと輝いて：〈上〉牧野絵美法学研究科助手	10.30 (火)	毎日 (朝刊)
76 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ⑥ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	10.30 (火)	朝日 (朝刊)
77 学生之新聞第561号：記事 河村知拓さん本学3年生、編集後記 大崎湖水さん同大学院2年生	10.30 (火)	中日 (朝刊)
78 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：8日 下村 脩本学特別教授が基調講演を行う	10.31 (水)	読売
79 現代日本誤百科 (704)：「殴ったことがばれたくない」町田 健文学研究科教授	10.31 (水)	朝日 (朝刊)
80 トランスフォーマティブ生命分子研究所が世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI) に選出される	10.31 (水)	中日 (朝刊) 読売 11. 1 (木) 日刊工業 11. 2 (金) 読売
81 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ⑧ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11. 1 (水)	朝日 (朝刊)
82 坂東泰子医学部附属病院講師は糖尿病における心機能不全の一因が「DPP4」の異常活性であることを発表	11. 1 (木)	毎日 (朝刊) 日経 (夕刊)
83 現代日本誤百科 (705)：自分の「欲望をふりかざす」町田 健文学研究科教授	11. 1 (木)	中日 (朝刊)
84 池内 敏文学研究科教授が竹島に対する日本と韓国の主張について解説	11. 1 (木)	朝日 (朝刊)
85 本学が参加する研究チームはアイヌの人々が縄文時代の遺伝子を受け継いでいると発表	11. 1 (木)	中日 (朝刊)
86 本学と静岡大学が連携し取り組むポストドクターの就職に関するデータベースが紹介される	11. 1 (木)	日経 (朝刊)
87 シンポジウム「企業内におけるうつ病対応—企業は従業員のうつ病とどのように向き合うべきか—」開催：7月16日 尾崎紀夫医学系研究科教授が治療現場を報告	11. 1 (木)	朝日 (朝刊)
88 加藤博和环境学研究科准教授と柳原光芳経済学研究科准教授が愛知県立豊田南高校「大学研究週間講座」で講師を務める	11. 2 (金)	読売
89 平成24年度秋の勲章 紫綬褒章：村瀬 洋情報科学研究科教授	11. 2 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
90 平成24年度イノベーションコーディネータ賞・若手賞 天野優子リサーチ・アドミニストレーション室研究員	11. 2 (金)	日刊工業
91 名古屋市立大学「サイエンスカフェ in 名古屋」開催：16日 山岡耕春環境学研究科教授が講演	11. 2 (金)	毎日 (朝刊)
92 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ⑨ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11. 2 (金)	朝日 (朝刊)
93 作家石岡琉衣氏本学卒業生を紹介	11. 2 (金)	中日 (夕刊)
94 草野完也太陽地球環境研究所教授などのグループが太陽フレアの発生条件を解明	11. 3 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
95 平成24年度秋の勲章 瑞宝中綬章：内山 晋本学名誉教授、太田 博同名誉教授、竹村富男同名誉教授、藤井省三同名誉教授	11. 3 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
96 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ⑩ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11. 3 (土)	朝日 (朝刊)
97 ドナルド・キーンの東京下町日記：美しい日本の暮らし コロンビア大学名誉教授ドナルド・キーン氏	11. 3 (土)	中日 (朝刊)
98 山本章夫工学研究科教授が電力会社や原子力プラントメーカーなどから報酬や謝礼を受け取ったと公表される	11. 3 (土)	中日 (朝刊)
99 病院の実力：抗がん剤治療 医学部附属病院の実績が取り上げられる	11. 4 (日)	読売
100 現代日本誤百科 (706)：この選手は「故障がある」町田 健文学研究科教授	11. 5 (月)	中日 (朝刊)
101 秩父宮賜杯第44回全日本大学駅伝対校選手権大会：4日 同大会に出場した平岡 悠さん本学学生を紹介	11. 5 (月)	朝日 (朝刊)
102 秩父宮賜杯第44回全日本大学駅伝対校選手権大会：4日 陸上競技部は17位	11. 5 (月)	朝日 (朝刊)
103 大学満足度調査：ビジネスパーソンが卒業した大学満足度ランキングで本学は10位となる	11. 5 (月)	日経 (朝刊)
104 ニッポン人・脈・記：大地に聞く⑤ 福和伸夫減災連携研究センター教授	11. 5 (月)	朝日 (夕刊)
105 現代日本誤百科 (707)：「一日でも早い復興を願う」町田 健文学研究科教授	11. 6 (火)	中日 (朝刊)
106 ひと・仕事：愛知・奥三河の花祭りを映像で記録 佐々木重洋文学研究科准教授	11. 6 (火)	中日 (朝刊)
107 ひと輝いて：〈下〉牧野絵美法学研究科助手	11. 6 (火)	毎日 (朝刊)
108 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ⑪ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11. 6 (火)	朝日 (朝刊)
109 目録：鷺谷 威減災連携研究センター教授	11. 6 (火)	中日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
110 杉戸信彦環境学研究所研究員などのグループが名古屋市中心部に活断層が縦断している可能性があることを突き止めた	11. 6 (火) 11. 7 (水)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 読売 朝日 (朝刊)
111 現代日本誤百科 (708) : 「予洗い」 町田 健文学研究科教授	11. 7 (水)	中日 (朝刊)
112 第3回「ひばくの記憶 原子力の夢」1952～54 : 沢田昭二本学名誉教授の話、故坂田昌一同名誉教授の記載のある極秘文書を紹介	11. 7 (水)	中日 (朝刊)
113 正四位瑞宝中綬章 : 黒積俊夫本学名誉教授	11. 7 (水)	読売
114 一般公開シンポジウム「不確実な未来に向け、名古屋のまちづくりはどう舵を切るか? -超高齢社会が地球温暖化と巨大災害に備える方法とは-」開催 : 11日	11. 7 (水)	中日 (朝刊)
115 愛知 (ここ) に人あり : 「大好き」といっしょ⑫ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11. 7 (水)	朝日 (朝刊)
116 あいちサイエンスフェスティバル2012さかえサイエンストーク開催 : 10月1日～11月2日 佐宗章弘工学研究科教授の話	11. 8 (木)	読売
117 名大カフェ “Science, and Me” 第27回「中部発人工衛星 “金シャチ1号” の挑戦」開催 : 10月8日 田島宏康太陽地球環境研究所教授の話	11. 8 (木)	読売
118 現代日本誤百科 (709) : 速い「ペースを刻む」 町田 健文学研究科教授	11. 8 (木)	中日 (朝刊)
119 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催 : 10月12日 野依良治本学特別教授が「科学の開国」をテーマに講演し京都大学教授山中伸弥氏と討論	11. 8 (木)	読売
120 愛知 (ここ) に人あり : 「大好き」といっしょ⑬ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11. 8 (木)	朝日 (朝刊)
121 第8回全日本学生室内飛行ロボットコンテスト開催 : 工学研究科の NAVIXα が3位となる	11. 8 (木)	読売
122 グリーンモビリティ連携研究センター設立1周年記念式典開催 : 7日 小野木克明工学研究科教授が「今後も与えられた役割をしっかりと果たしていきたい」とあいさつを述べる	11. 8 (木)	中日 (朝刊)
123 平成24年度「全国糖尿病週間」名古屋大学病院糖尿病公開講座開催 : 10日 大磯ユタカ医学系研究科教授や恒川 新医学部附属病院助教などが講演	11. 8 (木)	中日 (朝刊)
124 第4回中部の未来を考える会開催 : 26日 林 良嗣環境学研究科教授がパネルディスカッションのコーディネーターを務める	11. 8 (木)	中日 (朝刊)
125 第18回名古屋メダルセミナー開催 : 8日 野依良治本学特別教授が同メダル受賞者にメダルを手渡す	11. 9 (金)	中日 (朝刊)
126 愛知 (ここ) に人あり : 「大好き」といっしょ⑭ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11. 9 (金)	朝日 (朝刊)
127 創薬科学研究科創設記念式典開催 : 9日 濱口総長が「薬学系大学院設置は名大の悲願だった」とあいさつを述べる	11.10 (土)	中日 (朝刊)
128 仏像鑑賞のために : ⑮ 和歌山県立博物館長伊東史朗氏本学卒業生	11.10 (土)	中日 (朝刊)
129 愛知 (ここ) に人あり : 「大好き」といっしょ⑮ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11.10 (土)	朝日 (朝刊)
130 SKE48のグッジョブ : 医学部附属病院でSKE48のメンバーが看護師の職業体験を行う	11.11 (日)	朝日プラス・シー
131 現代日本誤百科 (710) : 乗客「車内に閉じ込め」 町田 健文学研究科教授	11.13 (火)	中日 (朝刊)
132 草の根会設立20周年記念講演開催 : 17日 福井康雄理学研究科教授が講演	11.13 (火)	中日 (朝刊)
133 名古屋産業科学研究所は本学など県内4大学と産業技術総合研究所の自動車関連技術のノウハウ等を一覧できるウェブサイトを開設	11.13 (火)	日刊工業
134 愛知 (ここ) に人あり : 「大好き」といっしょ⑯ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11.13 (火)	朝日 (朝刊)
135 日本・インドネシア学長会議開催 : 15、16日 濱口総長が開会式で「インドネシアから30大学に参加してもらった。歴史的な会議だ」とあいさつを述べる	11.14 (水) 11.15 (木)	日刊工業 中日 (夕刊)
136 現代日本誤百科 (711) : 「なじみの深い」競技 町田 健文学研究科教授	11.14 (水)	中日 (朝刊)
137 私の先生 : 近藤孝男理学研究科教授	11.14 (水)	中日 (朝刊)
138 愛知 (ここ) に人あり : 「大好き」といっしょ⑰ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11.14 (水)	朝日 (朝刊)
139 世界糖尿病デー : 堀田 饒本学名誉教授、愛知医科大学教授中村二郎氏本学卒業生、同教授天野哲也氏本学卒業生、同教授道勇 学氏本学卒業生の話	11.14 (水)	読売
140 ニッポン人・脈・記 : 大地に聞く⑩ 沈まぬ国にするために 山岡耕春環境学研究科教授	11.14 (水)	朝日 (夕刊)
141 現代日本誤百科 (712) : 「現状を鑑みる」 町田 健文学研究科教授	11.15 (木)	中日 (朝刊)
142 知の明日を築く : 減災連携研究センター	11.15 (木)	日経 (朝刊)
143 愛知 (ここ) に人あり : 「大好き」といっしょ⑱ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11.15 (木)	朝日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月23日(火)～1月18日(金)
 場 所：附属図書館医学部分館
 2階入口ホール
 時 間：9:00～20:00(平日)、
 13:00～17:00(土曜日)
 休 館 日：日曜、祝日、年末年始
 入 場 料：無料

附属図書館医学部分館
**第2回ミニ展示会「ノートの中の青春
 —講義ノートが伝える医学生の歩み—**



[問い合わせ先]
 附属図書館医学部分館 052-744-2505

11月23日(金)～2月2日(土)
 場 所：博物館展示室
 時 間：10:00～16:00
 休 館 日：日・月曜日、
 12月29日(土)～1月3日(木)
 入 場 料：無料

第25回博物館企画展
「なんじゃ?もんじゃ?—高木典雄とコケの世界」

[関連講演会]
 1月12日(土)
 場 所：博物館3階講義室
 時 間：13:30～15:00
 参 加 費：無料
 講演題目：「苔こけコケ」
 講 演 者：樋口正信氏(国立科学博物館陸上植物研究グループ長)



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

12月17日(月)、18日(火)
 場 所：国際開発研究科棟8階
 第1会議室
 時 間：13:00～16:15(12/17)、
 8:45～14:30(12/18)
 参 加 費：無料

特別講義「開発公共政策論」
 講 演 者：長田 博氏(帝京大学教授)



[問い合わせ先]
 国際開発研究科 052-789-5076

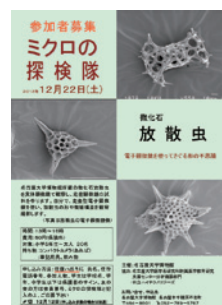
12月21日(金)
 場 所：カフェフロンテ
 時 間：18:00～19:30
 参 加 費：無料
 (会場にてドリンク等の注文が必要)

第19回げんさいカフェー Gen Science Café —
 講演題目：「変わりつつある災害時医療」
 講 演 者：松田直之(医学系研究科教授)

[問い合わせ先]
 減災連携研究センター 052-789-3468

12月22日(土)
 場 所：博物館実験室、
 東山キャンパス構内
 時 間：13:00～16:00
 定 員：20名
 対 象：小学校5年生以上、一般
 参 加 費：50円(保険代)

ミクロの探検隊
 テーマ：「微化石『放散虫』—電子顕微鏡を使ってさぐる形の不思議」



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

12月27日(木)
 場 所：ES総合館1階ESホール、
 環境総合館1階レクチャーホール
 対 象：事前申込者のみ

高校生防災セミナー

[問い合わせ先]
 減災連携研究センター 052-789-3468

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月16日(水)、17日(木)

場 所：野依記念学術交流館

参 加 費：無料

年代測定総合研究センターシンポジウム

内 容：講演、発表

講演題目：「炭素14年代キャリブレーションと水月湖年縞堆積物」

講 演 者：北川浩之（環境学研究科教授）

講演題目：「炭素14と宇宙線変動－奈良時代の異変」

講 演 者：増田公明（太陽地球環境研究所准教授）

講演題目：「元寇－沈没船の謎を探る－長崎県松浦市鷹島海底遺跡の発掘調査と出土遺物」

講 演 者：中田敦之氏（長崎県松浦市教育委員会）

講演題目：「東アジアにおける水田稲作技術の成立と発達に関する研究－その現状と課題（日本と中国のフィールド調査から）－」

講 演 者：宇田津徹朗氏（宮崎大学准教授）

[問い合わせ先]

年代測定総合研究センター事務局

052-789-2579



1月19日(土)、2月2日(土)

対 象：大学院生、ポスドク

参 加 費：無料

ビジネス人材育成センター

平成24年度後期 B 人セミナー

「Communications Styles」、「弁理士の業界と業務」(1/19)

「博士に必要なスキル」、「プレゼンテーションスキル研修」(2/2)

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

1月22日(火)～24日(木)

場 所：豊田講堂

時 間：9:00～19:00 (1/22)、

9:00～19:30 (1/23)、

9:00～17:30 (1/24)

Nagoya Symposium Frontiers in Structural Physiology

内 容：講演、ポスターセッション

[問い合わせ先]

細胞生理学研究センター 052-747-6794

1月29日(火)

場 所：情報基盤センター4階演習室

時 間：13:00～14:30

定 員：40名

対 象：一般

参 加 費：無料

平成24年度

第10回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「自動車情報システム（仮題）」

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

3月2日(土)

場 所：ES 総合館

時 間：10:00～17:00

参 加 費：無料

大学教育改革フォーラム in 東海2013

内 容：講演、セッション

講演題目：「学生の主体的学びをどう促すか」

講 演 者：川島啓二氏（国立教育政策研究所総括研究官）

[問い合わせ先]

高等教育研究センター 052-789-5696

名大トピックス No.235 平成24年12月17日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

松原 緑教養教育院准教授による英語の授業で CALL 教室にてリスニングを行う学生（平成24年11月20日）



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

128 学部の誕生と草創期④ — 教育学部 —

名大の文系4学部のうち、1949(昭和24)年5月に新制大学になると同時に、他の3学部から半年余り遅れて設置されたのが教育学部です。この背景には、戦前の教員養成は師範学校でおこなわれ、大学には教育学部がなかったことがありました。

1947年10月、名大に新学部創設委員会が設けられましたが、そこで構想されていたのは文・法・経済のみであり、教育学部は入っていませんでした。教育学については、新制施行後の文学部に教育学科を置くことを新制大学設置認可申請書に盛り込むことになっていました。

ところが、1948年7月になって、連合国軍最高司令官総司令部の民間情報教育局(CI & E)が、7つの旧帝国大学に対し、教員養成をおこなう独立した学部として教育学部の早期設置を強く要請してきたのです。これに対し、7大学の総長は、教員確保の困難などを理由として、すぐに設置することは難しいとの見解を示しました。名大の

田村春吉総長は、総合大学が教員養成を担うこと自体に反対との意見を述べています。

ただ名大は、中等教育教員の養成機関であった岡崎高等師範学校(1945年4月設置)を包括し、その教員を新制施行後の教養教育にあたらせる方針を決定していました。この点で、教員養成を任務とする学部を設置するに有利な状況にあったのです。そこで田村総長は、まもなく態度を変えて、他大学に率先して教育学部設置に積極的な姿勢を示すに至りました。そして1949年1月に教育学部創設委員会が置かれ、岡崎高師の教員もそのメンバーに入りました。岡崎高師が本学教育学部の前身にあたりとされるゆえんは、以上の経緯にあります。

こうして、新制名大の出発と同時に教育学部が誕生することになったのです。校舎は、本部や文学部、法経学部と同じ名古屋城内旧陸軍第6連隊跡(名城キャンパス)に置かれました。



1	2	3
4	5	

- 名城キャンパス全景。運動場を囲うようにして文学部、法学部、大学本部等の建物が並んでいたが、教育学部はその北側にあった(楢円で囲った辺り)。1963年に東山キャンパスへ移転した。
- 木造1階建ての教育学部2号館。背景に1959年に再建された名古屋城天守閣が見える。
- 教育学部2号館の廊下。歩くときと床がさしむ音がしたという。
- 初期の教官と学生たち。創設時は1講座だけであったが、1954年までに12講座に拡充された。
- 学部ゼミの様子。冬はすきま風が入って寒く、石炭ストーブや火鉢で暖をとってしのいだという。